

ひろせホーム見学記

「ご馳走さま」のフラダンスに釘付け！

ひろせホームの代表者、廣瀬たか子さんと初めて会ったのは、2006年のことだった。同じく里親をしている八王子在住の坂本洋子さんからの紹介で、乳児、しかも月齢の低い赤ちゃんを緊急避難的に受け入れているという。乳児院以外で、そのような施設があるのを知らなかった。是非、グループ型のひろせホームを見学してみたいと思い、東京湾を半周して、ホームのある千葉の君津に向かう。

その頃、ひろせホームには乳児から小学生まで6人の子どもたちがいて、賑やかだった。聞こえてきたのは、赤ちゃんの泣き声、歩行器の動く音。滑り台を駆け上る幼児の足音。小学生のお姉ちゃんの「ただいま」と帰ってくる明るく元気な声。

どれもこれもが、家庭の幸せな『音』に思えた。

というのも我が家のふたりの娘は、すでに高校生と中学生（当時）で、それぞれが親離れして、親の手を借りることが少なくなっていた。

漂ってくる乳児のミルクの香り。抱っこすると、赤ちゃん独特の肌の柔らかさが伝わってきた。そのどれもこれもが、非常に懐かしかった。

廣瀬家は、たか子さんで持っている。しかし、お母さんだけの力ではけっして、ホームを支えることはできない。そこを補完しているのは、お父さんの存在だ。縁の下の力持ちで、昼寝、食事、散歩、遊び。ホームがリフォームされる前は、大工仕事も行ってた。

たか子さんをサポートしながら、夫婦で子どもたちを育てている。

「お名前なんというの、いくつ」——初めての珍客に、たか子さんの後ろに隠れてしまう幼児。恥ずかしいのか、他人と接することに慣れていないのか、質問にはなかなか答えられなかった。

それが2度3度と通ううちに、慣れてきた。

「ひださんが来たよー！」そうたか子さんがいうと、「こんにちは」はいえないけれど、前回よりも子どもたちの立つ位置と私の距離は、ぐっと短くなった。

昨年、春休みに会いに行ったとき、「休みだから、お出かけしようか」というたか子さんの号令で、廣瀬家のバンに乗って、東京湾観音に向かった。

乳児を下でみているたか子さんに代わって、子どもたちと一緒に5人で観音像の内部を頂上まで上った。いちばん年下の子と手をつないで・・・。

小学生のお兄ちゃんとお姉ちゃんは、さすがに速い。競争するようにあっという間に上って、姿は見えなくなった。階段が少し急なので、小さい子は一段、一段。だが、一生懸命に上ってくるその姿がかわいらしかった。廣瀬家の子どもたちと思い出を共有できたひととき。また少し近づいたことになる。

食事の時間になった。「8人で食べても9人で食べても同じよ」たか子さんが誘ってくれた。

6時過ぎに夕食が始まる。お言葉に甘えて、食事をいただく。大きながんもどきの煮物。野菜サラダ、新鮮なとうもろこし。山盛りのご飯に汁物。そして果物。廣瀬家のフルコースは実においしい。旬のもの、地元で獲れた野菜や魚を子どもに食べさせたいという夫婦の愛情が籠っている。

夫婦は、乳児にスプーンで食べさせている。が、自分の手で食べさせることを容認している。手づかみで食べ物を掴み、皿の上やテーブルは大変なことになっているが、汚くなることを厭わず、子どもの成長期の行動をけっして遮断しない。

実の子や孫の子育ての経験があるだけに、夫婦のキャパシティが広いのだろうか。気長に、子どもたちが終わるのを待っていた。

とかく待てない親が多い。待つこと一。それは、ピアノや英語などの早期教育にもまして、必要なことではないか。ひろせホームにいと、子育てはあらかた終わっている身でも

ああすればよかったな、と気づくことが実に多い。

みんなが食事を終了したところで

「それではご馳走さまをしようか」

とたか子さんが促す。

すると、食卓を囲んでいた8人でご馳走さまのダンスが始まった。自作の詩と曲の「ご馳走さま」の歌にフラダンス風の振り付けだ。1歳を過ぎたばかりの乳児も、上の子たちの踊りに合わせて踊っている。

温かい雰囲気が居間中を包んだ。

何らかの事情で、実の親と暮らせない子どもの数は年々増えている。乳児院に措置される赤ちゃんも多い。しかし、親と子を結ぶのは、けっして血のつながりだけではない。愛情に包まれた父と母に育てられれば、たとえ過去に何か事情があったとしても、家庭的な育てなおしは可能だ。そう実感した1日だった。

たか子さんは信念の人である。彼女の「どの子も幸せに」という願いが叶う社会を私たちは作っていかなければならない。少子化、虐待。子どもをめぐるキーワードは、どれも甘いものではない。しかし、何かを始めなければいけないことは、大人の誰もが分かっているはず。小さな一歩だが、踏み出してみる時期にきている。